

# 研修報告書 No11

横浜市立大学附属市民総合医療センター 堀田裕一朗

研修施設：いの町立国保仁淀病院

仁淀川町国保大崎診療所

2012年1月の1ヶ月間、いの町立仁淀病院と仁淀川町の大崎診療所で地域医療研修をさせていただきました。

他県より高齢化が進んでいる高知県の地域を担う病院・診療所での研修では、外来患者さんの平均年齢が私の研修している大学病院と比較し高く、特に仁淀川町の大崎診療所では70歳代の患者さんをみると「若い」と思えるくらいでした。ただ、年齢に比べて非常に皆さん元気で、80歳を超えても背筋を伸ばして診察室に入ってくる患者さんの姿を見ると、「生活環境が違うところも元気に生活ができるのか」と驚きを隠せませんでした。

仁淀病院では病院外の研修として訪問介護に帯同させていただき、在宅での介護に医療がどういった介入をしていくのか、といった病院内には見れない現場を見せていただきました。定期的に家庭を訪問し、以前と変わった点がないかを日常会話を挟みつつ家族から聞き出し、各家庭に合った適切なサポートを提供する姿をみて、患者さんや家族に寄り添いながら適切な距離感を保つことの大切さを実感しました。

大崎診療所では4日間の研修でしたが、外来の他に訪問リハビリや訪問診療、パワーリハを経験しました。訪問診療では、大崎診療所から車で山道を登った地区にあるお宅を訪問しましたが、80代の寝たきりの患者さんを同じく80代の介護者（配偶者）が介護・看護を行う「老老介護」の実際を目の当たりにし、他県より早く高齢化が進んでいる高知の現状を垣間見ました。2010年の国勢調査では仁淀川町は人口に対する65歳以上の高齢者数がとうとう過半数を超えました。介護施設等に入りたくないという意味を被介護者が持つ場合、在宅で見ていくこととなりますが、在宅でのQOLを保つためには、家族の支えの他に医療の面でのソフト・ハードが充実しないとけません。上記のように高齢者が過半数を超えた、いわゆる「限界集落」と言われる状況で地域の体力が徐々に落ちている今、なかなか満足いくサービスを提供していくことができない現状があることを痛感しました。しかし、そういった状況でも地域で患者を支えていこうとする姿勢を職員の方々が持っており、情熱・愛情を持って患者さんやその家族に接している姿を見て、これからの自分がどういうスタンスで医療に向き合っていくかを考える良いきっかけになりました。

また、今回の研修で仁淀病院・大崎診療所の2か所の研修で共通する点として両病院の先生方が患者さんだけでなく、その背景にある家族・家庭まで含めて大きな視点で患者さんを見ていくということを感じました。慢性期の疾患を抱える一個人に関わる環境も考えながら外来で医療を提供していく姿は、大学病院で時間に追われる外来を目にしてきた自分にとって非常に印象的でした。

1ヶ月という短期間の研修でしたが、母校のある高知県での研修でこれからの地域医療の在り方や医療を支えていく上での心構えなど、学生時代だけでなく社会人になってからも学ぶこと

ができたことに感謝しております。そして、この3月には初期研修が修了し、とうとう専門を一つに絞っていくこととなりますが、この地域医療で得た経験を忘れずに日々の医療に活かしていき、今後機会がありましたら、成長した後に高知県の医療に還元できる日を持ってたらと思います。

最後に、この場をお借りして松浦先生をはじめとする仁淀病院の皆さま、沖先生・稲垣先生の大崎診療所の皆さま、そして地域医療の日程を調整していただいた水島さん、高知医療再生機構の皆さまには深くお礼を申し上げます。